

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00108

研究課題名(和文)ピューリタニズムの寛容論から構築される多文化共生の今日的原理

研究課題名(英文)Conceptions of Multicultural Toleration from Puritan Perspectives

研究代表者

森本 あんり (MORIMOTO, Anri)

東京女子大学・その他部局等・学長

研究者番号：10317349

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：現代までの主要な寛容論を類型化することで、時代や文化を越えて適用可能な寛容論を構築する可能性を模索した。類型化には限界もあるが、寛容の成立要件や内在的な矛盾にはある程度の共通性があるため、1「哲学者の回廊」型、2「原理分析」型、3「リベラリズムの問い直し」型、4「歴史的範例」型という四類型を抽出することが可能と判断された。また、20世紀の冷戦構造の発端を欧米のイランへの関与から読み直し、1979年のイスラム革命から9.11を経て今日に至る21世紀の世界をグローバルな宗教対立の激化という観点から再解釈した。イスラム社会では寛容の概念が中世的な枠組みで受容されていることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

寛容論は一方で現代リベラリズムの枢要徳と見なされながら、他方で特にイスラム圏を含む非西洋世界では近代啓蒙思想の押しつけと受け取られており、容易に架橋しえない見解の対立がある。そのため、時代や文化の相違を越えて適用可能な寛容論の類型は、異なる視座をもった人びとに共通の議論の土台を提供することができる。従来の近代化論は宗教の衰退を歴史的必然と想定してきたが、これも現代世界の实情に背馳しており、その過激化しやすい熱情を内在的に理解することの重要性も認識されるようになった。寛容論はいずれの文化においても他者受容の前提とされており、その原理を深く理解できれば対立ではなく包含を奨励することに有益である。

研究成果の概要(英文)：By surveying major theories of toleration up to the present, I explored the possibility of constructing a theoretical typology of toleration that is applicable across time and cultures. Although there are limitations to the typology, I concluded that it is possible to extract four types: 1) the "philosophers' corridor" type, 2) the "foundational analysis" type, 3) the "reexamination of liberalism" type, and 4) the "historical exemplification" type. In addition, I revisited the Cold War structure in the 20th century and traced its origin to the West's involvement in Iran. This perspective allows me to view the development from the Islamic Revolution of 1979 to 9/11 as a process of intensifying global religious conflicts. The study revealed that in Islamic societies the concept of toleration is understood and practiced within a medieval framework.

研究分野：神学・宗教学・アメリカ研究

キーワード：寛容 宗教間対話 ピューリタニズム イスラム 過激化

1. 研究開始当初の背景

今日のイスラーム原理主義は、ときに「イスラーム・ピューリタン」とも呼ばれてきた。これは彼らがコーランの章句を歴史的文脈や全体的関連から切り離して強調するためであるが、世俗的領域と宗教的領域を峻別しようとする西洋的な観点からすると、すべてのムスリムが原理主義者であることになる。こうした点から、現代イスラームの社会思想は、西洋近代が構築してきたリベラリズムの政教関係とは異なる理解を前提としていられると考えられてきた。

しかし、17世紀のピューリタニズムもまた、民族移動による異文化や異宗教との折衝を経験し、新大陸ではイスラーム法とも重なる祭政一致の体制を構成していたことが明らかになっている。宗教法による神聖政治的な支配形態も見られたピューリタニズムは、迫害する者とされる者という両方の立場を経験しつつ、やがてその宗教性の内部から良心の自由に基づく寛容の原理を生み出していった。近年の思想史分野で特にこの変遷を辿った研究者は、シカゴ大学教授のマーサ・ヌスバウムである。その著書『良心の自由—アメリカの宗教的平等の伝統』(原著2008年、邦訳は慶應義塾大学出版会刊)では、ピューリタニズムの歴史研究が哲学的な思想史研究と結び合わされ、現代世界に求められるべき良心の自由と平等の権利という理念が追求されている。

いっぽう、今日のピューリタニズム研究も、昔日とは大きく異なった環境のもとに置かれている。従来の研究は、アメリカとイギリスの両極で別々に進められる一国的な研究で、しばしばホイッグ的な進歩史観にくるまれていたが、近年はその両者を環大西洋システムの中で複眼的かつ批判的に見ることが研究動向の主流となっている。それでも、欧米の研究者の視点は英米史に偏りがちで、ピューリタニズムが辿った歴史を環大西洋域外部との思想史的な連関や比較へと広げることが少ない。ふりかえって日本国内の研究を見ると、これまではピューリタニズムをヴェーバーの近代化理論との関係に重ねて論じてきた経緯があり、現代社会が直面する宗教的な自己主張の相克や公共空間における宗教の位置づけ自体を問う力学を生み出すに至っていない。

こうした状況を克服するため、研究代表者は2005年に研究分担者の岩井や竹澤らと共に「日本ピューリタニズム学会」を設立し、国内での研究の発展に努めてきた。同学会はその後毎年活発に定例研究会と年次大会を重ね、関西支部でも年に一度は研究会を開催してきた。その中から生まれたのが、寛容論を媒介とする現代イスラームとの対話という主題である。

2017-20年度には、科研費基盤研究(C)による研究「ピューリタニズムの寛容思想とその現代的展開」を行い、ピューリタニズムが宿敵としていたカトリシズムとの折衝を経て寛容論へと転回する過程を探った。イスラーム寛容論との比較検討については、塩尻和子(東京国際大学)を招いて比較討論の学会を開催し、さらにモロッコのアル・アカワーン大学における国際会議に出席した際の考察を発表した。

2. 研究の目的

本研究は、このような先行研究に導かれつつ、歴史研究の視点と神学思想研究の視点と組み合わせることで、ピューリタニズムのもつ内在的な論理を析出し、より一般的な宗教の信念形態とその現実化として捉えることを目的とした。このような析出により、同様の信念形態をもつ他宗教、特に現代イスラームとの実質的な対話の可能性を拓くことができると思われたからである。したがって、本研究の核心をなす学術的な問いは、以下ようになる。「ピューリタニズムがその歴史的発展過程において内発的に生み出した寛容論や良心の自由論は、現代イスラームを含む宗教多元的な世界において、どの程度まで対話と共生に有効な参照枠を提供することができるか。」

これを具体的な研究課題として分節化すれば、以下ようになる。

1. 寛容は、現代自由主義の中核概念であって、その適用範囲には政治的信念からライフスタイルや個人的嗜好まで含まれるが、歴史的な由来からすればその対象はあくまでも宗教上の異なる意見であった。現代社会が享受している「言論の自由」「出版の自由」「集会・結社の自由」などの憲法上の諸権利も、17世紀のピューリタニズムに淵源をもっている。本邦ではこのような認識が希薄なので、これを歴史的にあとづけて明示することは、学術上の意義だけでなく民主社会の育成にも貢献するところが大きい。

2. 本研究は、ピューリタニズム一般ではなく、その寛容論や良心論に注目し、現代の宗教多元主義やイスラーム思想との比較検討を行う視座を得ることを目的としている。そのためには、まず神学的視点から宗教的信念の内在的な理解を確実に捉え、次いでこれに歴史学や社会思想史という外からの視点を加えることで、教義内容とその組織的具現化、すなわち思想とその社会的現実形態との両面を統合的に解明する必要がある。このような研究は、神学・歴史学・社会思想史という異なる観点から研究を重ねてきた三名の有機的な共同研究によってはじめて可能となる。

3. 本研究は、英米のピューリタニズム思想をネットワーク論やグローバル・ヒストリーを視界に入れつつ解釈し、環大西洋域からアジアへの発展を模索する。本研究が計画するイスラーム研究者との継続的討論は、現代社会が喫緊に必要としている宗教間の相互理解と相互尊重を深め、国内外の緊張緩和に寄与することが期待できる。歴史研究にとどまらない現代的な問いへの展開は、本研究の学術的な独自性であり創造性である。

3. 研究の方法

本研究は、ピューリタニズム寛容論の歴史的な変遷をあとづけ、そこから多文化共生の今日の原理を析出しようとするものである。グローバル化の伸展に伴う現代イスラームの世界的拡散は、公共空間の非宗教化という近代啓蒙のプロジェクトに重大な問いを投げかけているが、実はこの問いは17世紀に発する英米のピューリタニズムが辿った困難な対話の過程ときわめて相似的である。ピューリタニズムは、これまで宗教的に不寛容と見なされてきたが、世俗的要請からではなくまさにその宗教的信念から、寛容や良心の自由などの原理を内発的に生み出してきた。本研究は、その折衝と変容の過程を環大西洋的な思想史の枠組みで検証し、過激化する今日の宗教的対立に新たな参照枠を提供することを目指した。多文化が共生するためには、従来のリベラリズムが要請してきた世俗的中立性を越えて、宗教に内在する論理の延長線上に寛容論を展開し交差させることが不可欠だからである。

計画段階では、海外の主として2つの研究機関から研究者を招くか、本研究事業者が訪問することを予定していたが、いずれもコロナ感染拡大によりまったく不可能となった。このうち、「宗教研究コンソーシアム」(ICRS=Indonesian Consortium for Religious Studies)は、インドネシアの国立イスラーム大学、ガジャマダ大学、デュタワチャナ・キリスト教大学の3校が構成する宗教間対話の研究センターである。その所長 Siti Syamsiyatun 氏、理事で何度か来日して交流もある Jeanny Dheyanani 氏や Bernard Adeney-Risakotta 氏らの協力を仰ぐことが想定されていた。世界最大のムスリム人口を擁するインドネシアでは、諸宗教の多元的な共存が国家と社会の重要な課題となっており、その知見に学ぶことは有意義と思われたからである。

また、「グローバルリベラルアーツ連盟」(GLAA=Global Liberal Arts Alliance)には、世界で14大学が所属している。イスラーム圏で具体的な共同討議の候補となるのは、すでに行政レベルで親密な交流が存在し、所属する研究者が英語での学術交流に慣れているフォアマン大学(パキスタン)とカイロ・アメリカン大学(エジプト)の2校であった。

これら海外の研究機関との交流が不可能となったため、共同研究は国内にシフトせざるを得なかった。シンポジウムなどを開催する拠点は、主として「日本ピューリタニズム学会」であった。同学会は、これまでも関連する主題で研究会を重ねてきており、分野を異にする研究者たちが共同で討議をするためのプラットフォームをすでに所有していたからである。

4. 研究成果

本研究では、主に以下の二点に成果があったと判断できる。

第一点は、現代までの主要な寛容論を類型化し、時代や文化を越えて適用可能な寛容論を構築する可能性を模索したことである。類型化には限界もあるが、寛容の定義にまつわる成立要件や内在的な矛盾にはある程度の共通性があるため、1「哲学者の回廊」型、2「原理分析」型、3「リベラリズムの問い直し」型、4「歴史的範例」型という四類型を抽出することが可能と判断された。このうち歴史的にもっとも多いのは第一の類型だが、これには近代啓蒙に特有の誤解が内包されている。現代の寛容論では、第二の類型が寛容論全般の基礎的な準拠枠を提供する点で評価され、第三の類型は特に西洋リベラリズムの欺瞞的な側面への批判として有効である。第四の類型は、寛容の構想としてはごく控えめではあるが、具体的な歴史に範を取るためもっとも現実的な提案と思われる。

第二点は、寛容と不寛容の原理的な考察と現代的な折衝例の研究である。研究代表者は、20世紀の冷戦構造の発端を欧米のイランへの関与から読み直し、1979年のイスラーム革命から9.11を経て21世紀のグローバルな宗教対立が激化する過程を辿った。イランのイスラーム革命は、アメリカにとって「起きるはずのなかった」革命である。それを引き起こしたのは、結局のところ近代啓蒙の誤った世俗化論と、国内の福音派勢力の伸張を認知しようとしなかったアメリカの知的抵抗感である。イスラーム神学の伝統に現世的な失敗を合理化する神義論の発達が見られなかったことも、現代イスラーム思想の一部が過激化する歴史的な要因となった。また、イスラーム社会では寛容が中世的な枠組みで受容されていることも留意されねばならない。

なお、研究代表者の専門はアメリカ研究なので、19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカの黒人女性とクイア女性が経験した寛容と不寛容の実態をマサチューセッツ州の大学史に残る資料で確認したことも、歴史的範例の検証としてたいへん有意義であった。ここにも、ピューリタニズムの歴史的な遺産と現代的な寛容理解の折衝の成果がうかがわれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 森本あんり	4. 巻 406
2. 論文標題 「時代に媚びず」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本私立大学連盟編『大学時報』	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 17
2. 論文標題 「英米のピューリタニズムとコモンウェルス」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ピューリタニズム研究』	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森本あんり	4. 巻 5
2. 論文標題 「宣誓と詐欺 真実をめぐるアメリカ的伝統の逆説」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 17
2. 論文標題 「「臨床講義」の今日的意義 20世紀前半の台湾文化協会と民族運動」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静岡大学人文社会科学部『アジア研究』	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 竹澤祐丈	4. 巻 2021年第5・6号
2. 論文標題 『オシアナ』における統合と拡張 ジェームス・ハリントンの属州論における平等性の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『立命館法学』	6. 最初と最後の頁 508-539
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Anri Morimoto	4. 巻 10
2. 論文標題 The Passions and the Interests: An Edwardsean Understanding of Populism	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Jonathan Edwards Studies	6. 最初と最後の頁 202-207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 840
2. 論文標題 「今井宏『イギリス革命の政治過程』 「宮廷」対「地方」論の意義と 限界 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 「共存の哲学としての不寛容論」
3. 学会等名 三菱UFJ信託銀行次世代経営リーダー研修 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 「理解できない人々と共存するには 初期アメリカの歴史的経験に学ぶ」
3. 学会等名 フェリス女学院大学・キリスト教研究所講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹澤祐丈
2. 発表標題 「梅田百合香『ホブズ リヴァイアサン』に関するコメント」
3. 学会等名 経済学史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹澤祐丈
2. 発表標題 「J・G・A・ポーコックの複合国家論の特徴とその可能性」
3. 学会等名 第47回 日本イギリス哲学会 研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「ブリテン近代史研究の3つの焦点 千年王国、複合国家、歴史教育」
3. 学会等名 岩井淳先生退職記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 「リベラリズムの完成と陥穽 ニーバーからハズニーまで」
3. 学会等名 「文明構造の転換と日本の戦略」研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 「不寛容論 アメリカが生んだ『共存』の哲学」
3. 学会等名 研究・イノベーション学会「国際問題分科会」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 「『不寛容論』を書いて分かったこと」
3. 学会等名 初期アメリカ学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 「分断と陰謀論のアメリカ ポスト・トランプの時代に」
3. 学会等名 修学院フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「20世紀前半の台湾文化協会と民族運動 「臨床講義」の今日的意義」
3. 学会等名 シンポジウム「台湾夢2049 超現代臨床講義」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「「三つのブリテン革命」を考える ピューリタン革命・名誉革命・独立革命」
3. 学会等名 初期アメリカ研究学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「三つのブリテン革命再考 独立革命期におけるピューリタン革命・名誉革命の受容」
3. 学会等名 イギリス革命史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹澤祐丈
2. 発表標題 ジョン・デイヴィス(1569-1626)のアイランド論再考
3. 学会等名 日本イギリス哲学会関西支部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 誤れる良心の寛容論
3. 学会等名 宗教倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本あんり
2. 発表標題 アメリカ史のアイロニー リベラリズムの成功と失敗
3. 学会等名 日本基督教会関東支部・九州支部合同支部会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 ウェールズと合同問題 同化と異化、紐帯と地域連鎖
3. 学会等名 科学研究費採択課題の研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 大学における複合科目の実践と「地域社会と歴史」
3. 学会等名 科学研究費採択課題の研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 森本あんり	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 『改革が作ったアメリカ 初期アメリカ研究の展開』	

1. 著者名 森本あんり	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 256
3. 書名 『キリスト教神学命題集 ユスティノスからJ. コーンまで』	

1. 著者名 竹澤祐丈	4. 発行年 2022年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 359
3. 書名 『複合国家イギリスの地域と紐帯』	

1. 著者名 岩井淳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 331
3. 書名 『比較革命史の新地平 イギリス革命・フランス革命・明治維新』	

1. 著者名 岩井淳・道重一郎編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 359
3. 書名 『複合国家イギリスの地域と紐帯』	

1. 著者名 土井 健司、村上 みか、芦名 定道、島田 由紀	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 256
3. 書名 キリスト教神学命題集	

1. 著者名 岩井 淳、竹澤 祐丈	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 ヨーロッパ複合国家論の可能性	

1. 著者名 岩井淳・岡田健・川喜田敦子・君島和彦・木村茂光・戸川点・日高智彦・茂木敏夫・安井崇・油井大三郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 浜島書店	5. 総ページ数 222
3. 書名 『資料と問いから考える歴史総合』	

1. 著者名 森本 あんり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新潮社	5. 総ページ数 304
3. 書名 不寛容論 アメリカが生んだ共存の哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本ピューリタニズム学会 http://jpuritanism.com/ 初期アメリカ学会 http://earlyamericanists.jp/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩井 淳 (Iwai Jun) (70201944)	静岡大学・人文社会科学部・名誉教授 (13801)	
研究分担者	竹澤 祐丈 (Takezawa Hiroyuki) (60362571)	京都大学・経済学研究科・准教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------